幼児の自然教育

中沢和子

幼稚園教育の領域の中で、とかく自然は扱いにくい、むずかしいという声を聞きます。

その理由として第一に、特に大都会で子どもが親しむべき「自然」が失われてきていることがあげられています。子どもが自由に遊べる小川や野原は都会にはなくなってしまい、毎日、土を踏むこともない生活が多くなってきました。第二は、これにともなって子どもたちの自然に対する関心がうすくなり、テンポの速いテレビやマンガに気をとられていて、教師が苦心して誘導しようとしても興味をもってついてこないというのです。第三には、たとえ自然に恵まれていても時間や設備がたりなくて、充分に自然を扱うことができない、という点です。

この三つは多かれ少なかれどこの幼稚園でも感じられていることで、はじめの二つについては社会的にも大きな問題であります。発達する都市生活の中で、子どもが安全に遊び、自然に親しめる緑地をできるだけ確保し、まもっていくように、また子ども向きの放送や雑誌なども進んで向上させていくように、幼児の指導者は対外的にも積極的に努力しなくてはならないと考えます。

それと同時に、ほんとうに子どもたちの周囲に教材とする「自然」がないかどうか、子どもが自然に対して関心をなくしているかどうかということを考え直してみる必要があります。広い意味の自然はいつでもどこでも私たちの生活をとりまいているもので、どんな町の中でも昼と夜、四季の移り変りとともに動いています。こうした「生活の中にある自然」に対して関心をたかめることができないならば、海や山に連れて行っても子どもたちは自然をみることができず、往復の乗物やおべんとうのことしか覚えていない、ということになってしまうでしょう。乏しい自然の中でこそ、自然の教育は大切なものなのです。

× × ×

それでは、「生活の中の自然」とはいったいどんなものでしょうか。

たとえば、雨の日に長靴をはき、傘をさして幼稚園にやってくる子どもたちは、全身「雨」という気象現象の中にいます。「今朝は涼しいから」と一枚多く着せられたとき、この秋になってはじめてミカンなりカキなりをおやつにもらったとき、子どもたちは季節の移りかわりを知るはずです。そして子どもたちは、「着物がぬれる」とか「道が悪い」という雑念なしに大喜びで水たまりに入っていき、はじめての果物には歓声をあげます。この喜びは自然に対する感動であって、どんな子どもでも共通なのですが、自分でこの感動を持続し、発展させることができる子どもが関心の高い子どもとみられ、すぐに消え去ってしまう子どもは関心が低いとみられるわけです。そこで、こうした子どもの感動をその時その時に捉え、さらに感動の原因となった自然の印象を繰り返し深めることによって、この「感動」を「関心」にまで高めていくことが自然教育の第一歩であります。具体的な例として、幼稚園から小学校にかけてよく扱われている「お天気しらべ」をとりあげてみましょう。

お天気しらべを始める時期は何時でもよいようなものですが、幼稚園でこれに導入するには、秋の運動会の準備が始まる頃が適当です。運動会が近づくと、どの幼稚園でも毎日競技やリズムを練習したり、小道具の製作をしたり、家庭に持っていく通信も増えて、子どもの生活全体が運動会へ向かっていくでしょう。教師も子どももいそがしくて、とても自然ととりくむことはできないと思われがちですが、実はそうでないのです。運動会というものは晴でなければできませんから、降っても晴れても、子どもの心の動きをお天気に結びつけていくことができます。運動会の準備が進むにつれて、子どもたちの関心は高められ、いろいろな作業を通じて持ち続けられるでしょう。

季節からいっても秋は気象の変化が大きいので、晴や雨が適当に入りまじり、子どもの興味をそそるよい時期です。お天気しらべの記録をすることそのものは、話し合いやお昼のわずかな時間ですむことなので、ふだんならば全員の関心を集めることはなかなかできにくいのですが、このように運動会と結びつけることによって子どもたちに身近なものとなるのです。

カリキュラムを組むときは、このようにできるだけ広い領域にわたって子どもの感動を呼び起こすことのできる教材を選びたいものです。

子どもが年少であればあるほど、一つの驚きの時間が短く、次々と新しい興味に移っていきますから、特に年少児の教材はこの点を中心に考えなければなりません。

たとえば菊の花の歌に入ろうとする時は、どの部屋にも菊の花だけを飾り、「お花がある、きれいだな」という印象を「菊」という植物に集中しておいて、音楽・リズム、製作などに繰り返していくやり方です。ふつうの菊は一度植えておけば年々増えていくほど丈

夫なものですから、園の庭にも菊を作り、その花が咲きはじめる頃にとりかかるとよいでしょう。教師は小菊の花を二、三輪束ねて生花のブローチを作り、衿もとにでも髪にでも飾ってごらんなさい。花びんの花には気がつかなかった子どもでも、先生の胸の花には感激して、喜んで製作に加わるということもあり得るのです。

菊の葉を紙の上に並べてその上に白い布をひろげ、テラスなど平らな石の上でコツコツ叩くと、布に葉の形を染付けることができます。庭に菊の花が咲く頃は、日なたの暖かさが快い頃ですから、製作をしながら子どもたちは季節の移り変わりも感じるでしょう。かがみこんで仕事をしたあとは、「菊の花のように」輪になって両手を伸ばし、秋の空を仰いでごらんなさい。

このようにたくさんの体験が「菊」を通して獲得されていってはじめて、自然に対する鋭い感受性が育てられていくのです。

総合された立場に立てば、自然の教材は幼稚園の生活の中に汲みつくすことができないほどたくさんあります。とかく自然に乏しいと思いがちな冬の間も、健康と平行してうがいや手洗いのしつけ、予防注射、暖房器具の注意などよい教材となるでしょう。夏は強い日ざしを避けなければなりませんでしたが、冬は喜んで日なたに出るわけですから、太陽を中心のテーマとして日なたでなければできない虫めがねや電気あそび、砂鉄とり、影ふみなどができます。簡単な対話劇としてよく取り上げられる「北風と太陽」の話も、自然との総合の上で子どもの生活と結びつくでしょう。

× × ×

さらに、自然領域の大切なねらいとして、指導要項には「自分で考える力を養う」という項があげられています。

物事を考えるとき、ふつう大人は最初から言葉を使って考えはじめますが、大ていの子どもはここまで言語を使いこなすことができないので、彼らの行動そのものが考えを現わしています。金づちやねじまわしまで持ち出して、新しいおもちゃを徹底的にこわしてしまった子どもは、「かくかくのことを知りたくて分解し、これこれのことがわかった」ということはできませんが、おもちゃに対して持った「動く！ すごいぞ！」という感動が「どうして動くのだろう」という疑問に発展し、「この中に何かあるらしい、あけてみよう」という行動に移ったわけで、この過程はそのまま子どもの「考え」を示しているのです。

子どもの「考える」行動は、感動やよろこびよりももっと不安定に現われ、とらえにくいものですが、「こうだから」「こうなる」というように原因をつきとめ、すじみちを立てて物事を考える力は、実際にこの言葉で表現できない時代に養われていくものです。自然教育では子どもと自然のふれ合いの機会を作るだけでなく、進んで子どもに考える場を与えていかなくてはなりません。同じ教材を扱っても、年長児では特にここに重点をおいていく必要があります。たとえば、秋の終りに落葉を教材として充分に発展させたとき、園庭の落葉を一度は子どもと一緒にたき火にしてみましょう。たき火

の楽しさと同時に火のあと始末の訓練をし、火の役割と恐しさを感じさせ、考えさせることができます。冬のはじめには火災予防週間があり、やがて暖房器具も入りますから、生活面指導の基礎へ発展することができます。

ここにあげた幾つかの例でもわかるように、幼稚園の自然教育は決して小・中学校の「理科」のひきうつしではないのです。健康や言語の指導が子どもの生活と結びついていることは誰でもすぐ認めるのですが、「自然」となるとつい「生物・気象・機械・数、これは理科だ」と考えてしまい、学生時代の教科書を思い出しかねないようです。「時間も設備もたりない」という自然教育の問題点は、一つには教師がもっている「古き教科書の亡霊」のせいともいえるのではないでしょうか。教師はむしろさっぱりと理科の知識を捨て、子どもの眼、子どもの考えを通して自然に近づくことを学ばなくてはならないのです。

数と図形の扱い方については、最近専門の分野で研究が進み、よい本も出されていますからここでは触れませんが、これを教材とする時も他の領域との関連をはかり、日常生活に密着していなければならないことを申しそえておきます。

× × ×

最後に、評価の問題があります。

就学前一、二年間は、子どもの知能も身体も発育が不安定なので、幼稚園では小学校のように授業の細目が決められていません。しかし指導要録を呈出する幼稚園では、漠然としていても何段階かに分けなければならないので、一見結果がはっきりしない自然領域はとかく評価しにくいと思われているようです。一部の幼稚園では、知能テストやこれに類するペーパーテストがかなり行なわれており、評価の参考にもされています。この種のテストは専門家によって研究され、優れたものも多いのですが、テストはその時の理解の程度や傾向を知る手がかりとなるだけのものであって、たとえ生物や理数関係の問題が組み込まれていたとしてもこれだけで自然全体の評価ができるものではありません。

自然に対する感受性をたかめ、考える力を育てるという目標は、子どもの生活の内面を養うものであって、この結果は全生活に表現されてくるはずです。小鳥の動きを巧みに現わせる子ども、菊の花を画面いっぱいに描ける子どもはそれだけ感動が大きかったことを示し、注意ぶかくお茶をつげる子どもは、考える力の土台をきずきつつあるのです。このようにみていくならば、評価そのものも高められ、同時によい自然教材や指導方法を発見することもできるでしょう。

自然に対して素朴な驚きと喜びを持ち、原因を解明しようとする努力は昔から多くの科学者の研究の原動力となったものです。また科学だけでなく、文学・絵画・音楽などの芸術も自然に対する鋭い感受性を母胎として発達してきたといえるでしょう。幼児の人格の土台の一つをきずく意図を以って、自然教育の指導を充実させてほしいと考えます。（東京大学理学部　植物学教室・東洋英和女学院短大）